

〔翻訳〕

メランヒトン『道徳哲学概要』（その1）
EPITOME PHILOSOPHIAE MORALIS REPETITA ANNO 1548
第1巻
LIBER PRIMUS

菱刈晃夫

かつて宗教改革の倫理学者(Ethiker der Reformation)ともディルタイによって呼ばれたメランヒトンについて詳しくは、拙著『メランヒトンの人間学と教育思想—研究と翻訳—』（成文堂、2018年）を参照されたい。同書171-230頁には、今回から試訳として掲載する『道徳哲学概要』の原型となる1532年のEpitome ethicesの全訳が収録されている。神学のテキストとなる『神学要覧』（Loci praecipui theologici, 1559）と同様、メランヒトンは倫理学においても自らのテキストを生涯に渡ってアップデートし続けている。ちなみにロキの全訳も継続中である¹。

今回訳出のものは1550年にヴィッテンベルクで出版され、その最終版に近い形態を表している。第1巻の全訳を3回に分けて紹介する予定である。

ラテン語テキストとしては、Melancthon, Philipp : Ethicae Doctrinae Elementa et Enarratio Libri quinti Ethicorum. hrsg. von Günter Frank. Stuttgart 2008.を用い、あわせて収められているドイツ語訳も適宜参照した。原本はVD16M3291としてバイエルン州立図書館インターネットアルヒーフから閲覧可能であり、こちらも適宜参照した²。

なおCR16, 165-276には、その後の1554、1557、1560年のテキストの異同が収録されていて、今回用いたフランクの1550年版と相違する箇所が注に示され

*1 国士館大学 図書館・情報メディアセンター「初等教育論集第20号」

https://kokushikan.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=14190&item_no=1&page_id=13&block_id=21 閲覧2020年2月25日

*2 Münchener Digitalisierungs Zentrum, Melancthon, Philipp: Ethicae Doctrinae Elementa, Viteberga, 1550 [VD16 M 3291]

<https://daten.digitale-sammlungen.de/0008/bsb00087683/images/index.html?id=00087683&groesser=&fip=eayasdasewqsdaseayztsfsdr&no=1&seite=21> 閲覧2020年2月25日

ている。逆にフランクによるテキストには、1554、1557、1560年版との異同が示されている。

* * *

哲学の中で伝えられている徳に関する一般的な教えを称賛する者は、ふつう次の理由をもって満足させられる。それは神から伝えられた人間の生の規範であり、外的な行いを支配するためにある、と。これを激しく冒瀆する者は、自分にも他人にも多くの厳しい罰を招くことになる。この称賛は真実のものであり、決して侮られてはならない。それでも、この教えの尊厳と規律について考えさせられるたびに、他にも重大で重要な理由が付加される。したがって常に次の四つの理由〔原因〕が考察されねばならない。ここから徳の認識が明白なものとなる。

第一。というのも、そうした〔徳に関する〕知識は、神が存在することの証だから。なぜなら精神における高潔なものと醜悪なものとの永遠で不動の区別、これは明らかであり、この〔区別するという〕自然本性は偶然によって生じたものではなく、何らかの方法で永遠の建築家による精神〔神〕によって生じたものであることは明らかであるから。

第二。というのも、この知識は神がどのような存在であるかを教えるから。なぜなら高潔なものと醜悪なものとを区別するとき、私たちは神が知恵であり、自由であり、真実であり、正義であり、親切であり、純潔であり、憐れみ深いなどと理解するからである。そして確かに常に祈りにおいて、こうした神の特質は注視されねばならない。それによって私たちは義務として神に榮譽を帰するのであり、神を生きることのない、つまり貪欲で邪悪な墮落させる悪しき霊どもから区別する。

第三。というのも、神に関しては審判による証があるから。なぜなら、もし後にそうした区別にふさわしい罰が続いて生じるのでなければ、神は人間の精神における高潔なものと醜悪なものとの区別を無駄に作ったことになるからである。同じく自然の秩序によって普遍的に、過失がある場合には良心に対して拷問〔苦悩〕が続くことになる。これが神的な審判の証である。同じく恐るべき不幸が、規則に従って、この生では恐るべき罰に付随することになる。

徳に関する教えにおいて神によるこうした三つの理由を考察するとき、次に第四のものが付け加わる。すなわち人間の生の規範は外的な行い、もしくは規律においてあるものだというものである。このような理由の考察は倫理学を大いに飾り、精神を神について、そして人間の創造についての考察へと導き、驚くべき計画によって人間が作られていること、つまり人間の自然本性が神の像であり、その中でいわば知恵と神的な徳の光が輝くように作られていることを思い起こさせる。しかし〔人間の〕弱さは甚大なものであるので、そうした美しい自然の秩序を、簡単に、しばしば、さまざまに、恐ろしく混乱させてしまう。そこで、どの

ような理由でこうした弱さが存在するのか、どのような治療法を神は示しているのか、私たちが探究するように忠告してくれるのだ。しかしこの弱さの原因について、治療法について哲学は何も述べてはくれないので、哲学を超えた他の何らかの教えが必要であることを私たちは認識する。つまり約束の声、もしくは福音による教えである。さらに考察する中で福音と哲学との区別を保つことは必要であり、これについてここで私たちは区別をするし、しばしば他の場所でも述べられねばならない。

ところで私はこうしたことを初めに述べたが、それはこの教え〔道徳哲学・倫理学〕がさらに愛され、熱心に吟味されるようになるためである。そのとき私たちはこれが神的な光であり、注意喚起であり、神に関する証言であることを認識することになるであろう。

道徳哲学とは何か？

QUID EST PHILOSOPHIA MORALIS?

それは自然法の説明であり、理性が判断できる限りで、通常の学問における秩序によって集められた記述である。その推論〔による結論〕は徳の定義であり、あるいはすべての人間における規律を導くことに関する教えであり、外的な規律について公言する限りでは、十戒と一致する。

道徳哲学は神が教会に与えた教えと争うことはないのか？

PUGNAT NE PHILOSOPHIA MORALIS

CUM DOCTRINA,

QUAM DEUS ECCLESIAE TRADIDIT?

教会の教えにおいて大いに必要なのは光であり、それは法と福音の区別を知ることである、としばしばいわれている。

法、これは神が人間を創造する際に精神の内に挿入した〔植え付けた〕教えである。これは私たちがどのようにでなければならぬか、何となされるべきで、何となされるべきではないかを教えている。恩恵を約束するために、完全な服従を命じ、神の怒りを示し、法を汚す者に罰を与える。道徳法のすべてであり、十戒の中に語られている。

他方で福音、これは悔悛の説教であり、罪を咎め、罪の赦し、和解、義、そして永遠の生を約束する。これは神の子によって無償であり、この約束についての知識は決して私たちと共に生まれつきのものではなく、密かな、もしくは永遠の父によって提示されたものであり、あらゆる被造物による考察を超えた外にある。

この区別が理解されれば、哲学については簡単に判断される。道徳哲学は決し

て福音の約束ではなく、ちょうど自然法のような法の一部であり、規律について公言するものである。そしてちょうど自然の法のように、あるいはそこから生じる法の命令による高潔なものを、キリスト者は、聞き、把握し、是認し、規律の支配する中でこれを正しく用いることができる。このように真の哲学を把握し、是認し、そして正しく用いることは可能である。それどころか多くのもっとも誤った説得によって規律への軽蔑が強固にされてしまうことは大いに嘆き悲しまれるべきことであり、これによって公的にも私的にも私たちは恐ろしいほど〔神から〕罰せられることになる。

ところで神の法が善いものであることは疑う余地のないことであるので、パウロがいうように、規律はもっとも厳しく神から命じられていて、これに続いて哲学が述べる内容は真実であることは明白であること、これは理解され是認されるべきであること、そしてキリスト者はこれを正しく用いることができることとなる。ちょうど私たちが数の教えを理解し、是認し、用いることに同意するようなものである。というのも一括して真の教えとは、神を起源とする光であるから。そして物事について故意にどんな方法であっても真実に対して反論する者は、この戒めを冒瀆していることになる。偽証してはならない〔出 20:16〕。

高潔の誓いにある記述は真実である。

真実は自分の身体に関わるすべての危険よりも優先されるべきである。

レーグルスは戻ってくることを誓った^{*3}。

したがって身体の危険よりも誓いを優先した。

正義は罪のない者を傷つけることはしない。

アベルは潔白であった。

ゆえにカインは彼を殺したとき、不正を行ったのだ。

こうした記述は真実であるから、これに異を唱えることは、神、この光の創始者に敵対して侮辱的である。しかし私たち自身を規律が制御し始めるとき、この教えはより明るく役立つことになるであろう。そこでまた私たちはどのような理由によって規律が優先されるべきかを四つ述べよう。

第一、神の命令により。

第二、罰を避けるため。

第三、他者の平安に仕えるため。

第四、キリストにおける教育であるため。

*3 キケロー『キケロー選集9』岩波書店、1999年、152頁。『義務について』1,39より。

というのも神は、良心に反する過失に固執する者の内では有効に働くことはないから。この規律がもつ有用性の大きさは、私たちが教会の中でこれを愛することへと鼓舞する。

この教えの特別な有用性とは何か？
QUAE SUNT PRAECIPUAE UTILITATES
HUIUS DOCTRINAE?

答え。私は上で一般に、徳に関する教えを、あるいは教会で、あるいは哲学で伝えられているにせよ、神が存在し、それがどのように存在し、それが審判者であることの証言である、と述べた。この有用性と、この最初の点を再び述べておきたい。

次にその他を付加する。神は、すべての人間が規律によって制御されるのを望み、この教えは規律の一部であり、確かにとくに魂を自制へと動かすから、これが〔人間の〕生き方・在り方に有益であることは疑いようもない。

しかし第三の有用性は、これである。教会においては天の教えと哲学とが授けられる必要がある。この両者が並べて置かれることによって、どちらの種類の教えもより明らかで好ましいものとなる。しかし両者の区別は、もしこの二つの種類を認識することがなければ、指し示されない。

さらに教会がこうした主題について語る時、それはとくに法と関係しているが、多くのことがここで前提とされている。すなわち徳の名称、定義、自然法についての教え、そしてどのような教えによる徳をもこの教えが準備されることでもっと上品に定義し識別することができるようになるだろう、とうということである。

この有用性を侮ることは大きな野蛮であり、その中には多くの悪徳が内在している。次いですべての高潔な学芸を軽蔑することは、学芸の光で人類を飾っている神に対する侮辱である。確かにこの道徳の教え〔道徳哲学・倫理学〕は汚されないまま伝えられているときには、神的な精神と一致する知恵であり、自然において最大に明白な証言であり、神が存在し、どのようにしているかを明らかにしてくれている。

しかし学派は学問によって区別される。ルキアノスが学派についての対話で追究しているように、だれから知られるのか、どの学派がより真実なのか、髭からか、あるいは厳しい顔つきからか、もしくは他の者からなのか。確かに彼は自分の仕方では戯れている。しかし哲学において正しく教育されている者は、この教えが真実であることを知っているし、（伝えられるところはどこであろうと）その証明を伝え、その探究における秩序によって前進し、確かさの原因を追究し、教え

を真実の基準へと向ける。ところで私たちは真実を喜んで受け入れ、神にその光のゆえに感謝を表し、誤りを断固として跳ね返し、反駁しよう。

人間の目的とは何か? QUIS EST FINIS HOMINIS?

ちょうど旅を始めようとする者が、そこに向けて途上の道を調整するように、はじめに確実な終点について考えるが、同じようにすべての行いにおいて初めに目的が考慮されねばならない。

したがって道徳哲学では、最初に目的についての問いがある。人間が正しい理性に従って第一に努力するものとは何か。この目的から逸れないようにするには、何が望まれるべきか。そして何に対して人間のすべての行いは向けられるべきか。第一に誉が帰せられ、その中で自然本性が安らうような創造者の認識へと、私たちを誘うがゆえに、教会の教えは明瞭な説明を有している。

ゆえに神の法に従って目的とは神自身である、ともしっかりと適切に述べられねばならない。私たちが正しく認識し称賛する場合には、その善意を伝える神である。簡単に、次のように答える者はこう述べる。目的とは神の真の認識と称賛にある、と。もちろんこうした語り方は巧みに理解されねばならない。次のように目的について神の子は教えている。あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである〔マタ 5,16〕。そしてコリントの信徒への手紙一 10 節には、こう記されている。すべて神の栄光を現すためにしなさい〔一コリ 10,31〕。同じく詩編。私たちではなく、主よ。私たちではなく、あなたの御名こそ、栄え輝きますように〔詩 115,1〕。そして第一の戒めは、はじめに神の認識と神への服従の義務について命じるとき、これが人間の目的であると教えている。

しかし、この目的そのものは神による決定から考えられる。これによって神は人間を作った。我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう〔創 1,26〕。それゆえに神は理性的な被造物を作ったのである。この中で自身の似姿が輝き、神が認識され、神に類似した徳が備わるようになるためである。人間の自然本性はこの目的のために作られているので、人間が真の神の認識と愛を得ようと努力することは必要であり、私たちに自身の善意を伝えておられる神の中で安らうことは必要である。このことは正しい教育によって明白であり、神の法と一致している。

福音は私たちを同じ目的に導くが、しかし子の教えを付加する。この教えは人間の理性による考察を超えて定められている。そしてこのように目的について次のような言葉を述べ伝えている。永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです〔ヨハ 17,3〕。

これは教会の教えが述べ伝える目的についてだが、最初にこれについて語られねばならなかった。教えの区別が考慮されるためである。さて哲学のことを語ろう。

理性の真の光は人間の中の自然本性に挿入されて〔植え付けられ〕いて、神の法と一致するが、しかしこの暗闇において神の知識は覆い隠されていて、多くの疑いによって曇らされている。したがって哲学者たちは、たとえ時には神に向けた行いに関連づけられたことを指示するにしても、それにもかかわらずたいていただ徳について言及するだけであり、徳が目的であるという。たとえストア派やその他の多くの者たちが馬鹿げたことを伝えるにしても、それにもかかわらずここではこう正しく述べている。すべては人間のために生まれ、人間はさらに神のためである、と。

そして良心は神が目的であると証言する。それゆえに罪深い行いにおいて良心は人間に苦痛を与えるが、それは自然の光によって神の怒りを識別し、恐れるからである。その反対に正しい行いにおいて精神は安らぐが、それはそうした行いが神という審判者と観察者に是認されると判断するからである。したがって真の哲学に従って、人間に独自の目的は神の認識、あるいは神にある。しかし哲学者たちはすでに私が述べたように語る。徳が目的である、と。私たちがこのようにいうとき、私たちはそのような呼びかけそのものの中に、次のことを理解しよう。最高の徳とは、神が認識されること、そしてすべての高潔な行いが神と関連づけられていることである。

ところですでに二つの対立する見解、ひとつはアリストテレスの、もうひとつはエピクロスのを引用したいと思うので、慣習的な仕方で語ろう。問題はこうである。徳は人間の目的か、あるいは欲望か。アリストテレスはいう。徳による行いが人間の目的である、と。徳が目的であるというとき、私たちは無為な習慣のことを理解しているのではなく、アリストテレスがいうことを保ちたいのだが、たとえ私たちが徳というほどの状態が短いにしても、キケローが述べるようなことを考えている。したがって字句への拘泥は避けよう。そして単純明快に判断しよう。欲望が目的であると強く主張するエピクロスの見解は誤りである、と。それに対して哲学においては正しく、こういわれている。徳が人間の目的である。つまりたとえ苦痛や損害が続いて起こるにしても、正しく行われねばならないこと〔正しい行為が目的である〕。アリストテレスはこの見解を明らかな証明によって確かなものになっている。それはこのように自然学に由来するものである。

どのような自然においても、その自然本性による活動にもっとも固有なものが目的であることは、極めて確かである。すなわち、この活動に向けて自然はまず作られているのだから、固有な〔独自の〕ものはある。

徳の行いは人間にとってもっともふさわしい〔固有な〕ものである。
したがって徳の行いが目的である。

この推論は真実であり、たとえエピクロス派が多くの称賛に値する議論によって異議を唱えるにしても、この説明はここでの討論に多くの光をもたらしてくれる。

しかし次のことは前もっていわれておかねばならない。こうした論争の起源は、精神における自然の法と、心における欲望〔傾向〕の矛盾〔対立〕にある。どこにその始まりがあるかを教会が教えてくれている。この論争の判定を明白なものにするため、人間の悲惨、法との対立、人間における欲望〔傾向〕、これら悪の起源と呼ばれているものの原因について教会に伝えられている教えと対比するのは有益である。人間は法に従うように作られていて、もし自然本性が墮落していなかったらなら、この法への服従は人間の心の中で快く輝いていたことであろう。なぜなら善人にとって善くあることは正しいことだから。しかし人間の自然本性が墮落した後には、私たち自身の中で、そして社会にも多くの混乱〔無秩序〕が続いて生じた。法と欲望との調和は破壊され、それから外からは悪徳と対立するようになった。ちょうどカミッルスが悪しき市民が妬んだように。それゆえに正しい行いには苦痛と危険が伴うようになる。この起源からエピクロスによる論拠の非常に多くの解明が主張される。それゆえにこうした警告をエピクロスの論拠を検討する前に私は語った。

さてエピクロスの顕著でもっともらしい論拠とは次である。

第一

Primum.

おのおのの自然本性に好ましい〔ぴったりの〕目的とは、そこへ向けて自発的に大きな衝動によって自然本性が駆り立てられるものであり、他のものから駆り立てられたことを苦勞して〔やっとのことで〕行うようなものではない。ちょうど下方への石の動きが自然であり、上方へのそれが乱暴〔無茶〕であるように。

ところで人間の自然本性は自発的に快樂を目指している。それとは反対に法には苦勞して〔やっとのことで〕従う。

ゆえに快樂が〔人間の自然本性の〕目的である。

小前提に答えよう。私たちにとって、私たちが知るところでは、どういう理由で人間の中の力の調和が混乱させられてしまったのか、その解決は簡単である。小前提において非本質的なごまかしがある。というのも、たまたま人間の自然本性

の墮落により、それは生じるのであり、その結果、悪しき欲望の情火はそれほど大きく、私たちはやっとのことで〔苦勞して〕神の律法に服従することになってしまったからである。しかし、もし自然本性が損なわれず、人間の内に神に関する確かな知識が輝いていたなら、さらに私たちの中で神への愛が燃えていたなら、すべての服従は快いものであったであろう。こうした解決は教会にある私たちにとって明確で有益な警告であり、こうして私たちはこうした力の不調和がどれほど悲劇的な悪であり、それがどのような理由でそうなるのか、考えることになる。しかし哲学において真に明らかに次のように答えられることは可能である。私は小前提を否定する。なぜならそれは補助的な言説から単純なことへと繋がるごまかしだから。というのも全部の自然本性が快樂へと駆り立てられているわけではなく、精神は行いの前にも後にも抵抗するからである。なぜなら享樂の後にはもっとも悲惨な苦惱が続くからである。しかし自然本性の目的が、そのすべてが行いの後にひどく退けられてしまい、自身の行いの考察に耐えるよりも、むしろ存在しないことを望むような物事や行為にあることは不可能である。ちょうどダビデが自らの誤りについて考えるのに耐えるよりも、存在しないことを望んだように。こうした解明はもっとも明白にエピクロス派の人々を反駁しているし、すべての自然本性が快樂へと第一に駆り立てられているわけではないことを示している。

第二

Secundum.

どのような自然本性も正しく秩序づけられた欲求によって、まずは自らの保持を熱望する。

快樂は人間の自然本性の保持であり、徳は破壊である。ちょうどソクラテスやそれに似た人々において、彼らが正しい行いのゆえに殺されたことが示すように。

ゆえに快樂が目的であり、徳ではない。

私は小前提を否定する。なぜなら非本質的なごまかしがあるという理由からである。というのも徳が自然本性を破壊するというのは、それはたまたま〔偶然〕そうなるからである。なぜならソクラテスが殺されたのは、ソクラテスにおける徳に原因があるのではなく、敵たちの不正に原因があるから。ちょうど盜賊が金を奪い取ろうと旅人を殺すのは、旅人の金に原因があるのではなく、盜賊の悪しき意志に原因があるから。それでも、もし人間の自然本性が損なわれていなかったなら、危険が徳に付随することはない。さらに徳は自然本性の遵法者〔保護者〕

であり、それは徳に報酬〔恩恵〕を与える神の審判が証している。さらに徳によって種が保たれるというのは普遍的な真実である。真理、正義、勇敢は、社会全体にとって有益である。たとえ個人が今のところ滅ぼされるにしても。しかし全体が守られるのは、部分が守られるよりも価値がある。

加えて、この善そのものの破壊、さらに善のすべての敗北は、人間がこの生だけに生まれてきているのではないことの明らかな証である。なぜなら将来において善と悪とのあいだには何の違いもないという条件で生まれてくるのであれば、自然本性が徳を、徳による恩恵と罰を理解することは不可能だし、なぜなら徳と不徳、恩恵と罰を知ることが、いたずらに〔理由もなく〕自然本性に挿入されていることになるだろうからである。

小前提が反駁されると、次に大前提も否定される。これは真実の大前提ではない。自然本性は、ただある〔存在する〕がためだけに自己保存を熱望する。そうではなく次が真実である。自然本性が無傷な状態においてあるように、すべてのものは秩序によってこの状態を熱望しているということである。自然本性はそこに向けて作られている。というのも、この無傷の状態において自然本性は真に保持されうるから。しかし秩序なく欲望が動き回る場合には、目的に関する終結には至らない。なぜなら無秩序な欲望は依然として自然本性に反して熱望するからである。さらに、このように呼ばれることができるが、無傷さは個も、あるいは種も破壊することがあってはならない。したがって、もししばらくのあいだネロが損なわれていない〔無傷〕であるなら、悪事に対する良心の痛みが、それは破壊だが、やはり続かないということはある。そうして悪魔は、〔当人が〕このように存在しているよりも存在していないことを望み、それどころかより恐ろしく悲しませ〔苦痛を与え〕、自身を無に至らせることによって、その不幸〔悲惨〕を引きちぎることができないようにする。こうしてユダについてもっとも痛ましく言われている。「生まれなかったほうが、その者のためにはよかった」（マタ 26,24）。したがって大前提が真実ではない場合、誤った結論が続くことになる。それゆえ確かに大前提では、こういわれるべきだった。どのような自然本性も正しく秩序づけられた欲求によって、とりわけ自らの保持を熱望するが、それはそこに向けて作られている限りでの状態においてである。

しかし小前提に関するもう一つの解決は、より明快であり、次のことを明らかにしている。これは快樂は種の保存ではなく、したがって徳によって自然本性は偶然にも破壊されてしまうということ、を。さらに常に自然本性の無傷には、もし人間の自然本性が歪められていなかったなら、徳が伴う。

第三

Tertium.

エピクロスのもっとも重要な推論を述べた。これについては後でさらに付け加えられる。しかし、むしろ教会の教えから取り入れられた推論を述べておきたいと思う。これは知らされておらず、暗闇が広がっている。

神の法と福音が、いわば最高の善と約束するものは最高のものであり、そのために他のものが熱望されるのを命じる。

法と福音は、この生で、さらにこの生の後に服従する者に対して安らぎと喜びを約束する。こう言われているように。いかに幸いなことか、主を畏れる人。彼の家には多くの富があり、彼の善い業は永遠に堪える〔詩 112,1,3〕。掟を守る人は掟によって生きる〔ロマ 10,5〕。同じく、その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない〔ヨハ 16, 22〕。

ゆえに誠に快樂であるところのものが喜びであり、最高善である。

まず小前提に答えよう。たとえ、この生において、さらにこの生の後にも報酬、それは徳に付随するが、これが約束されていることが真実であるにせよ、それにもかかわらずこの報酬は、第一の善ではなく、熱望されるべきではない。この生における報酬については明らかであるように、理由の中でも、なぜ教会が十字架の下にあるのか、このことが同じく検討されることになる。それゆえに教会は十字架の下に服している。それは神が自身の栄光のために、私たちの快さのためにではなく、そのために仕えるべきであるから。それにもかかわらず、だれかが生きてどこかで生の報酬をもらうことは必要である。エレミヤ、洗礼者、パウロ、その他の似たような人々と同様に。それでも彼らが非常に大きな苦勞によって圧迫され、ついに殺されてしまうのだが、こうして私たちは、神が自身の栄光のために仕えるべきであり、すべての善が神自身を認識すること、賛美すること、これに従うことにあり、報酬にあるのではないことを知るようになる。報酬は中間にあるのであり、それはより高次の善よりも、むしろ最高の善に仕える。こうして後に永遠の生について私たちは最高善が神の知恵を知ることにより、それに付随するのは義しさであり、喜びではないことが分かるのである。それゆえにこう記されてある通り。永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです〔ヨハ 17,3〕。しかし無に帰されて神を賛美しないとき、次のことが容易に理解される。つまり生は必要であり、神の賛美を妨げる永遠の苦しみが無いような、そうした生が必要であることが。

したがって答えは簡単である。報酬を熱望するのは正しいが、しかしそれは最高善のためではなく、無に至らせられることなく神を賛美するのに必要であるからである。こう記されてあるように。主を賛美するのは死者ではない〔詩 115,17〕。

そして一般に次の原則が保持されることになる。神は人間によって自ら最高善やそれ以下の善が求められ請われるのを欲しているが、こう記されてあるように、それは段階が混乱させられない限りにおいてである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる〔マタ 6,33〕。こうして日々の祈りでは、両方の様式が合わされることになる。御名が崇められますように。私たちに必要な糧を今日与えてください〔マタ 6,9. 11〕。しかし神は、この世の生で身体にとって必要な財産が求められることを欲している。これには四つの理由がある。その第一は、私たちは偶然に生きているのでも、偶然に身体的生のために必要な財産を配布されているわけでもないことを認識するためである。そうではなく、これらの財産はもちろん神の支配によってとりわけ教会のために提供されている。マタイによる福音書第 10 章に従うと、二羽の雀が 1 アサリオンで売られているのではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている〔マタ 10,29f〕。

第二は、生活なくして、住居なくして、政治なくして、教えは広められないからである。そこで神はこれらの財産を与えてくれるが、それは教えが賛美されて広められるのに役立つためである。

第三は、こうしたものを冀うことによって、私たちが信仰と祈りを訓練するためである。

第四は、恩恵の約束を思い出させるためであり、これは常に祈りの中で秀でていなければならない。これは毎日の祈りにおいて考えられなければならない。真の信仰と希望によって神からこの賜物は期待されなければならない。こうあるように。思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです〔一ペト 5,7〕。そしてこうした祈りや希望は、空虚なものではなく、確かなものであると感じる。それはこの慰めによって自らを支える者たちである。そして自らの秩序によってあるものを追い求めるとき、他のそれより下位にある財産を見るとき、さらにもっとも重要な目的と、最重要の目的を認識するのに奉仕する段階の違いがよく見えるのである。

エピクロスによる第四の論拠

Quartum argumentum Epicuri.

二つの善のほうの一つよりもよい。徳と幸運が二つのものである。すると徳によって繁栄している幸運が強力な飾りであることはもっとも真実である。ちょうどフニアデスが皇帝ジギスムントよりもはるかに勝り、だれもエレミヤよりもヨセフの生涯をより多く望まないようなものである。

ゆえに徳は最高善ではなく、二つが結び付いた財産が求められねばならない。

答えよう。解決は極めて簡単である。二つの結び付いたものが求められるべきである。もし両方のものが連結されることができない場合、より秀でたものが手放されないような仕方であれば、それは正しい。そして自分の場所で各々が必要であるものを追求することが常に求められている。なぜなら必要なことはなされるべきであり、つまり、こういわれているように、それぞれの場所で神の法は各自に命じているからである。あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯〔詩 119,105〕。別の仕方では介入や、野心や、あるいは貪欲が、スキピオが戦わなければならなかったように、さらに付け加わってならない。エレミヤは、たとえ自分が死ぬ運命にあることを知っているにせよ、教えなければならない。

したがって両方の善が結合されえない場合、それでも一つの優れているものを保持する必要がある。そこで徳はより優れているものである。たとえば報酬が加わらないにしても、これが目的であることは明白である。それが哲学のみならず神の法とも一致する真の帰結である。しかし人間の理性は常に激しく抗議する。それゆえにエレミヤは無とされてしまうのに正しく行動しているのだろうか、と。ここで福音の教えが答える。エレミヤは無にされてなくなってしまったのではなく、いつも神を賛美するために、生き返ったのであり、救われたのだ、と。というわけで徳はもっとも優れた善であり、次に従っている。各自そのようにあるもののためにそうであるのは、それがよりそれにふさわしい。こうは続かない。二つの結合した善のほうがよりよい。徳と平安である。ゆえにパウロはこの結合したものをそれに合った仕方では求めない。なぜなら必要な一致をその場所でパウロは行わなければならない分だけ、禁止されているのとは反対に、それだけ止めなければならない。

第五の議論

Quintum argumentum.

善の秩序において最終のものが、すなわち目的である。

平安、それは徳に続くものだが、これがそれに当たる。

ゆえにこうした平安が目的である。

答えよう。私は大前提を否定する。というのも時間的に最終的なものが最重要である必要はなく、しばしばもっとも重要な目的が時間的なものよりも先になる。ちょうど太陽が夏に大地を熱するが、それが第一の目的である。それに乾燥が続

くが、それが一番の目的ではない。散歩の第一の目的は体温を高めることであり、その結果として消化が生じる。これに続いて顔色がよくなるが、とはいえこれが後に続くのではあるが、それにもかかわらず、これが最も重要なものというわけではない。ヨセフはとくに神の意志のゆえに他の既婚者から離れている。その後になお風評のゆえにそうしているのだが、それは後からのものであるとはいえ、それにもかかわらず最も重要なものではない〔神の意志のゆえにというのが最も重要なものである〕。このようなにある通り。「祖国に対する愛情と、（国家のために子をころし）、賞讃ねらう熾烈なる、欲はこうして勝つであろう」^{*4}。フルートゥスをまずは祖国愛が動かし、その後に栄光への愛が、その順序に従って続いて生じることができる。この行をヴァッラはエピクロス論を強化するのに不正確に捻じ曲げている。

このようにしばしば一つの事柄、もしくは活動から多くの目的が配列されるが、目的の段階が考慮されなければならない。そして何が第一の目的であるかが考察されなければならない。それはたとえその他の目的が一緒にならずとも、求められなければならない。ちょうどエレミヤが、たとえ他の目的が続いてこなくとも、信仰告白において神に、自らの良心の正しい判断に従ったように、その結果として神の民の中でもっとも優れた人間の証拠となり、自らの平安となったように、など。

私はエピクロスの考えを強化するかのように見える特別な論拠を語り、真実の説明を加えた。そしてこうした理由からも概観することは有用である。というのも、それはなぜ学者たちが目的について一致しないのか、その起源を明らかにするからである。すなわち、そのとき情欲の強情さが精神の判断に対抗しているからである。他の者たちは不動の正しい規範、神的な精神にふさわしい、つまり判断や法に従う。他の者たちは情欲が襲い、彼らは自身の衝動によって判断を奪い去り、その結果として無力な者と見なされてしまう。そこで哲学は、教会の教えに向けられるとき、より明瞭なものとなる。

しかしもう一度私は学生たちに神の戒めを思い出すように警告し懇願する。隣人に関して偽証してはならない〔出 20,16〕。真理を慈しみ、その中に安らぐように。巧みな装飾のもの、言葉巧みな誤った意見を守ることのないように。そうになると数多くの歪められた異常な性格が、新奇なものへの愛や反論することへの愛着によって、間違った馬鹿げた意見の擁護者と見られるのを欲するようになってしまうのである。この悪しき些事へのこだわりと名誉欲より前に、残りの人生においてしばしば大きな災いの原因があるばかりでなく、教会にとって真に壊滅的なことがある。

*4 ウェルギリウス『アエネーイス(上)』泉井久之助訳、岩波文庫、1976年、417頁。

徳のみが善であるというストア派の言説は正しいか？

**EST NE RECTE DICTUM A STOICIS,
SOLAM VIRTUTEM ESSE BONUM ?**

古くからの重要事項の進路に関する討論を考察することは、馬鹿げた見解を擁護するためではなく、比較の中で真理をより明らかにするために有益である。そして詭弁が見出され、嘘がはねつけられるとき、私たちは真実の見解の中で安らう。ところでこの議論において善という概念について議論されることになる。

まず実際に創世記から善の素描が集められる。そこではこういわれている。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった〔創1,31〕。ここで善は神によって作られたものを意味し、その〔定められた〕地点で神に喜ばれるものである。そして決まった使用もしくは目的のために秩序づけられていて、これを神はよしとした。創世記の中でいわれていることのこの解釈は、哲学でいわれていることと比較するために、入念に熟考されなければならない。というのも哲学者は創造には言及しておらず、事物について考察するからである。そして善は自然と調和する何かであり、決まった目的に向けて秩序づけられているという。ちょうど喉が渴いた者にとって飲み物が善であるように。

しかし第一に善という名称は次のように区別される。一方は自然の善〔自然的善〕、他方は徳の善〔道徳的善〕である。

自然的善とは、神によって作られたもの〔事物〕であり、その定められた地点で、何らかの使用のために秩序づけられていて神に喜ばれるものである。ちょうど太陽、大地、食べ物、飲み物、徳である。

ところで道徳的善とは、ただ徳の行い〔徳ある行い〕、もしくは徳であり、理性による正しい判断と一致し調和するものである。したがってそれは正しいといわれるわけで、神の光〔神的光〕が精神に植え付けられていて、神的精神と一致調和するからである。ちょうど道徳的善としては、洗礼者ヨハネが信仰告白を捨て去るよりも、むしろ死を望んだことがあげられる。

しかし神の言葉が善という名称を、道徳的善だけでなく、神によって作られたすべての事物についても用いる場合、それゆえ続いてそう話す人々が非常に多くの健康な人々である場合、私たちもまたそのような仕方で話すことにし、そこで個々の場所で、その言葉が意味しているものを見ることにしよう。したがって慣例的な区分について検討していこう。

高潔な善とは、行為もしくは徳であり、理性による正しい判断と一致する。

有用な善とは、自然本性を守るのに役立つものであり、生、生活に必要なもの、食物、住居、着物など、あるいはそのために得ようと努力されるもの、つまり金銭のようなものである。

甘美な善とは、ある自然な秩序づけられた欲求と一致するもので、ちょうど喉が渇いているときに飲む間に、飲むことで喜ばせられるようなものである。

これに対して悪という名称はばらばらのものを意味するが、それでも一般的に次のように記述される。

悪とは、神的な秩序、神によって作られた自然の破壊であり、神がそれらを作り出したのではない。次に従って。イスラエルよ、お前の破滅が来る。わたしに背いたからだ。お前の助けであるわたしに背いたからだ〔ホセ 13,9〕。破滅とは、つまり、罪であり、死であり、その他の災難である。しかし二つある。罪の悪と、罰の悪である。

罪の悪とは、行為もしくは態度であり、神の法と争うものであり、こうした悪を私たちは悪徳や罪と名づけている。これを神は作り出さないだけでなく、また望みさえもせず、是認もしない。それどころかこれを拒絶し憎む。こう記されている通りである。あなたは、決して逆らう者を喜ぶ神ではありません〔詩 5,5〕。

もう一つは罰の悪と呼ばれているもので、それは自然本性の破壊であり、罪に続くものであり、神の法と争うものではない。ちょうど死、病、そして多くの災難のようなものである。しかし、たとえもしこれらの破壊が、神によって作り出されたものではないにせよ、それにもかかわらず神は正しくあろうとし、自身とは敵対的な罰を抜きにして自然を守ろうとはしない。このように罪に刑を宣告するとき、神は自ら見捨てられた自然を滅ぼされるままにしておき、正義のゆえに罰を欲する。

それゆえに罰の悪を神は欲しているといわれ、正義のために是認しているともいわれる。こうしたことにはとくに次の言葉が関わってくる。町に災いが起こったなら、それは主がなされたことではないか〔アモ 3,6〕。つまり神が人々を矯正しようとしないうような罰は決して考えられないということである。神は病気、飢餓、戦争によって叱責する。それゆえ教会は死やその他の災難を悪と名づけている。というのも神によって作り出されたものではなく、自然を破壊するからである。

それゆえに私たちはストア派の馬鹿げた言動を退けよう。彼らは死、飢え、その他の災難が悪と呼ばれることを欲しない。そうではなく私たちは神の声が語るように語ることにし、なぜ罰を悪と名づけるのかを理解しよう。そして思慮深く罪と罰とのあいだの区別を考察し、そうした下劣で凶暴な者たちを非難しよう。彼らは、神は罪の扇動者である。つまり罪を欲し、それどころか罪を是認していて、しかも罪の創始者であり、加担者であると述べる。こうした見解は明らかに神に敵対して侮辱的である。彼らによって弁護されているペテンや屁理屈を反駁するのは困難ではない。

イザヤの言葉に関して、光を造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造

する者。わたしが主、これらのことをするものである〔イザ 45,7〕。これに対する困難を伴わない応答は、悪が物質的に理解されること、つまり有害な物質について、ちょうど毒についてのように、そこでは神によってその物質が作られるが、それは善であり、ちょうど神聖な火によってドクニンジンが癒すようなものである。しかしすでに墮罪後はこの弱い自然は多様な形で損なわれるようになる。それゆえに多くの有害なものが悪といわれるようになり、この段階のものが学問的に罰の悪と関連づけられるようになった。ちょうど預言者たちがしばしば一般的に罰の悪について語るように。エレミヤがこういうように、災いも、幸いも、いと高き神の命令によるものではないか〔哀 3,38〕、つまり罰である。このようにしてエレミヤのいうことは正しく理解される。私は神である。善と悪とを、つまり罰を作る神である。

徳とは何か？ QUID EST VIRTUS?

慣例の定義で十分に明白である。徳とは態度〔習慣〕であって、正しい理性に従おうとする意志である。ところでこの定義は原因を明示しているが、ちょうどその他の主題においても、このようにここで原因について考察することで、物事がより明瞭になる。徳の始原にあつて直近の作用因には二つある。すなわち正しい判断によって意志を支配する精神と、その判断を自由に、安定して、そして堅固に好んで受け入れ、その正しさを喜ぶ意志である。

したがってアリストテレスは『ニコマコス倫理学』第6巻で述べている。理性が光にもたらすものを求める努力が必要である〔1139a20-25〕。そしてすべての健康な人々は、精神の中になすことと避けることとの区別が輝いているのを見ている。さらにこの徳の規範の存在を確立するが、それでも、この徳の規範は、どこから来て、なぜそうした自然の知識〔自然本性に備わる知識〕が徳の規範となり、そうした知識などと一致する服従が善であるか、熟考しなければならない。したがってここで人間の自然本性の中にあるこの光の泉が考察される必要がある。すなわち神的な精神についての考察である。

なぜなら人間は神の像であるように作られているからである。神は計り知れない好意によって、もっとも優れた最高のものを私たちの中にあるその類似的な本質へと作り出したのである。すなわち、それは法の知恵に似たもの、意志における自由、そして徳に類似したようなものである。このために神は最初の人間に、その社会的な本質に参加させる聖霊を注ぎ移した。神はこの贈与が私たちに対する大きく真なる愛の証拠であることを望んでいる。この愛を認識することが私たちには必要とされているし、反対に神を愛することも求められている。

しかし、たとえ自然本性の墮落後に強大で悲惨な弱さが続いたにしても、それにもかかわらず精神は〔神から〕植え付けられた知識を保っていて、意志もある程度の自由をもっている。というのも神は私たちの中に証拠が輝くことを望んでいるからである。つまり神がいること、神がどのように判定していること、そして自身について警告を与える規律であろうと欲しているからである。というわけで、その知識が永遠で不変の神の精神と一致しているときには、その判断は正しいといわれるのであり、そうした神的な精神の規範と調和している場合には、意志は善である。それゆえに徳の原因について語られるとき、問題は次にあるわけで、それはヨセフが他人〔ポテパル〕の妻を退け正しい行いをしたのはなぜか、さらにダビデが他人の妻〔バテシバ〕を奪ってしまい正しい行いをしなかったのはなぜか、ということにある。人間の精神の中にある規範が考察されるだけでなく、同時にあの最初の不変の規則、すなわち神的な精神、人間の精神の中でこの光がそれに類似するように作られている、その神の精神が吟味されるべきである。

次いで、私たちはこの規範と一致する意志は、したがって善であることを知るのだが、それは神の意志と調和しているからである。しかし意志には自由選択があり、それは極めて強力で、いわば卓越したものに作られていて、情念が襲い掛かってくるのに対抗して譲歩することがない。ちょうど海の中で岩礁が風や波に譲歩することがないように。

このようにして、徳の定義について何度も語られ、規範の原因とその最上位のものへと突進していかなければならない。したがって通常のこうした定義に次のように付け加えられることは極めて正しいことである。徳とは態度〔習慣・振る舞い〕であり、神のために正しい判断に常に従おうと意志を傾ける〔傾注する〕ことであり、その結果として神にも感謝を示し、他者にも神の意志を明らかにすることになる。ちょうどキリストがいうように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである〔マタ 5,16〕。そして詩編にも、人はこぞって主を仰ぎ見、主を畏れ敬い、主に依り頼む〔詩 40,4〕。

（以下その2に続く）

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K00112 の助成を受けたものです。

（ひしかり てるお・教授）